博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　鈴木　智美　　印

学位申請者　胡　娜（コ　ナ）

論　文　名　中国語を母語とする日本語学習者によるモダリティ副詞の使用実態に関する研究―対照中間言語分析の手法による特徴語「たぶん」の分析を中心に―

【審査の結果】

審査委員会は鈴木智美を主査とし、本学の阿部新教授（主任指導教員）、伊集院郁子教授、幸松英恵准教授、外部委員の藤森弘子本学名誉教授の 5 名で構成された。最終試験は 2026 年 7 月 31 日（金）に行われ、審査委員会は全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するのにふさわしいものであるとの結論に達した。

【論文の概要】

本研究は、日本語教育の実践に寄与することのできる基礎的研究として、中国語を母語とする日本語学習者（以下、CNS）によるモダリティ副詞の使用分布と使用傾向を「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(以下、I-JAS)から採取したデータを用いて、記述・解明することを目的としたものである。本研究で取り上げる日本語のモダリティ副詞は、話し手の心的態度を表すと同時に、後続の陳述内容を予告することにより聞き手の理解を方向づける機能を担っており、その適切な運用は日本語による円滑なコミュニケーションを支える重要な要素となる。しかし、日本語学習者にとってその運用は容易ではなく、例えば、日本語学習者による「たぶん」の過剰使用については、形態的にも、また文構造としても誤りがないにもかかわらず、その使用が不自然に感じられ、時に発話意図が不明瞭となり、談話の流れに支障を来すことがあるという指摘がこれまでにもなされてきた。しかし、副詞は活用がなく、命題構造の中でその中核を担うものとは位置付けられないため、教育現場で取り立てて指導される機会が少なく、「たぶん」についても、「たぶん～だろう」のように文末表現に付随する形で提示されるにとどまっている。このような状況の中で、モダリティ副詞についての習得研究は十分に蓄積されておらず、初・中級学習者を対象とするものや、誤用研究の視点から学習者の使用をとらえるものは見られるものの、産出された実際の例

に即して、より包括的に学習者のモダリティ副詞の習得状況を解明する研究は、これまで十分に行われてこなかった。以上のような背景から、本論文では対照中間言語分析（Contrastive Interlanguage Analysis）の手法に基づき、CNSのモダリティ副詞の使用実態を日本語母語話者（以下、JNS）との比較を通じて、学習者の日本語習熟度、コーパスにおける設定されたタスクの性質、モダリティ副詞の意味用法という複数の異なる観点を立て、多面的に明らかにした。

本論文は、第Ⅰ部序論、第Ⅱ部本論、第Ⅲ部結論の三部構成で、全10章から成る。各部・各章の要点は以下のとおりである。

第Ⅰ部序論、第1章では、本研究の研究目的と研究背景を述べた上で、方法論的背景として、コーパス言語学の概要を整理し、本研究の理論的枠組みである対照中間言語分析モデル(CIA^2)の趣旨を説明した。さらに、論文全体の構成と論の進め方を示した。

第Ⅱ部本論は研究Ⅰと研究Ⅱから成る。研究Ⅰは第2章から第4章で構成され、I-JASのデータを用いてCNSによるモダリティ副詞全般の使用分布をとらえた。研究Ⅱは第5章から第9章で構成され、研究Ⅰにおいて、CNSが使用するモダリティ副詞の特徴語として浮かび上がった「たぶん」の使用傾向を詳細に掘り下げた。

研究Ⅰ（第2章～第4章）の各章の要点は以下のとおりである。

第2章では、日本語学の観点から日本語のモダリティおよび副詞に関する先行研究を概観し、モダリティ副詞の位置づけと下位分類を整理した。その上で、本研究における「モダリティ副詞」の意味用法を大分類7タイプ（Ⅰ.表現類型、Ⅱ.真偽判断、Ⅲ.価値判断、Ⅳ.比況判断、Ⅴ.検討・注釈、Ⅵ.条件・仮定、Ⅶ.対人態度）、さらに小分類13種類（（a）意志・願望、（b）命令・依頼・勧誘、（c）疑問、（d）感嘆、（e）確定、（f）不確定・推量、（g）評価、（h）比況、（i）検討、（j）取り立て・限定、（k）仮定、（l）譲歩、（m）丁寧）に整理した。そして、日本語のモダリティ表現および副詞の習得に関する先行研究を検討し、文末のモダリティ表現に焦点を当てた研究が多いこと、個別のモダリティ副詞の研究はあるもののモダリティ副詞全体を体系的にとらえた研究が不足していること、質問紙による調査や、小規模な会話資料に基づく研究は行われているが、近年開発された大規模コーパスのデータを活用するなど、十分な質と量を担保した研究が行われていないことを指摘した。これらの問題点を踏まえ、CNSによるモダリティ副詞全般の使用傾向およびJNSとの異同を大規模コーパスのデータを活用することを通じて、実証的に明らかにすることを研究Ⅰの課題として設定した。

第3章では、分析に用いるI-JASの基本情報として、データの提供者（12の

言語を母語とする日本語学習者、および日本語母語話者）に関する情報（年齢層、性別、母語別の人数）、言語データ収集のために設定されたタスクのバリエーション、および学習者の日本語能力について確認し、同様に、本研究が対象とするCNSの年齢層、性別等の基本情報、および日本語の習熟度別の分布を確認した。その上で、I-JASのデータから副詞の用例を抽出する方法、さらにモダリティ副詞の用例を抽出する方法、そして、モダリティ副詞を用いた産出文を抽出する手順と留意点を記述し、課題Ⅰで分析対象とするモダリティ副詞の種類は、CNSの産出によるものが39種、JNSが46種、用例数はCNSが3,708例、JNSが2,026例となったことを示した。

第4章では、課題ⅠとしてCNSによるモダリティ副詞全般の使用を、①使用頻度・多様性・高頻度語・特徴語、②タスク別の使用傾向、③CNSの習熟度別の使用傾向、④意味用法別の使用傾向のそれぞれの観点から、JNSとの比較を通じて分析した。その結果、①CNSはJNSに比べてモダリティ副詞の10万語あたりの調整頻度が低く、語彙の多様性を測る指標であるGuiraudの*R*値も低く、語彙的多様性も低いことが明らかになった。また、各モダリティ副詞の産出率はCNSでは「たぶん」が最も高く、対数尤度比を用いて算出した特徴度もCNSでは明らかに「たぶん」が高く、「たぶん」がCNSの特徴語（過剰使用語）として認められた。②タスク別の分析では、CNSもJNSも対話形式のタスクでモダリティ副詞の使用頻度や多様性が高く、ストーリーテリングやストーリーライティングでは低かった。ただ、JNSはタスクに応じて使用する副詞の使い分けがあったが、CNSではほぼすべてのタスクで「たぶん」の頻度が高いことがわかった。③CNSの習熟度別の分析では、下位群、中位群、上位群の順にモダリティ副詞の使用頻度が高く、上位群はJNSを上回ることがわかった。さらに、どの群も「だぶん」が高頻度語となっていた。④意味用法別の分析では、CNSがⅡ.真偽判断の副詞を多用する一方、JNSはⅤ.検討・注釈の副詞をより多く用いていた。なかでもCNSでは、Ⅱ.真偽判断に含まれる(f)不確定・推量用法の1,570例のうち「たぶん」が99.4%（1,560例）を占め、実質的に「たぶん」一語への偏りが顕著であった。これらの結果を受け、研究ⅡではCNSによる「たぶん」の過剰使用に特に着目し、JNSとの比較を通してCNSの使用実態をより詳細に記述・解明することとした。

研究Ⅱ（第5章～第9章）の各章の要点は以下のとおりである。

第5章では、「たぶん」に関する先行研究を、「たぶん」の意味・機能、統語的特徴、使用実態の3つの観点から概観した。意味・機能としては、「たぶん」に命題内容が伴う場合には、推量機能、不確定明示機能、相手への配慮を示す機能などがあり、命題内容が伴わない場合にはフィラーとしての機能があること

が先行研究でまとめられてきた。また、統語的特徴としては、文における「たぶん」の出現位置に関して、基本的には命題全体を修飾するモダリティ副詞として文頭に置かれるが、文中での位置にも一定の自由度があることがわかった。また、文中で「たぶん」と共起する表現に関する研究では多様な表現との共起が示されているが、先行研究は主に書き言葉の資料を対象とした結果であり、話し言葉における実態を実証的に明らかにする必要があることがわかった。さらに、日本語学習者による「たぶん」の使用実態に関する先行研究では、学習者による「たぶん」の過剰使用が早くから指摘されてきたが、多くは初・中級学習者を対象とし、それを母語干渉などによる誤用としてとらえるにとどまっていた。そのため、上級学習者を含む「たぶん」の使用実態を詳細に記述し、対照中間言語分析の観点から解明することが残された課題として確認された。以上から、研究Ⅱの課題として、CNS と JNS における「たぶん」の使用分布とその比較（課題Ⅱ）、「たぶん」の出現環境から見る CNS と JNS の使用傾向（課題Ⅲ）、「たぶん」が係る命題内容の性質から見る CNS と JNS の使用傾向（課題Ⅳ）、「たぶん」の意味・機能から見る CNS と JNS の使用傾向（課題Ⅴ）の 4 点を設定した。

第 6 章（課題Ⅱ）では、「たぶん」の使用分布を①全体の使用頻度、②タスク別の使用状況、③習熟度別の使用状況の各観点から考察した。①全体的使用頻度では、CNS の調整頻度（10 万語あたり 230.4 例）が JNS（同 148.0 例）を大幅に上回り、過剰使用が改めて裏付けられた。一方、産出者の割合では JNS が 96%であるのに対し、CNS は 74%となっており、CNS には「たぶん」を全く使用しない学習者が約 4 分の 1 存在するという二極化の傾向も見られた。②タスク別では、JNS がストーリーライティングや独話式のストーリーテリングでは全く使用しないのに対し、CNS は全タスクで産出が確認され、特に絵描写タスクでは JNS の約 5 倍の使用頻度を示した。③習熟度別では上位群・中位群・下位群のすべてにおいてその使用頻度が JNS を上回り、上位群は JNS の約 2.5 倍に達したほか、中位群で一旦減少し、上位群で再び増加するという U 字型パターンが確認された。

第 7 章（課題Ⅲ）では、「たぶん」について①出現位置、②共起する文末モダリティ表現の各観点から、CNS と JNS それぞれの使用傾向とその異同を記述した。①出現位置は両グループとも「文頭」「文中」が約 9 割を占めるが、検定の結果、CNS では「文頭」「一語文」（「たぶん」一つのみの使用）で、JNS では「文中」「文尾」で使用頻度が高く、有意な偏りが見られた。②共起する文末モダリティ表現については、JNS が 364 の「たぶん」の使用例において 70 種類の文末モダリティ表現を使用していたのに対し、CNS は 1,370 の使用例において 59 種類にとどまり、JNS のほうがより少ない使用例において、より多様な形式を使

用していた。共起する文末モダリティ表現に着目すると、統計的に有意な偏りが認められ、JNSでは「複合形式」、「伝達態度」を表すもの、「説明」を表すものとの共起が有意に多く、CNSでは「叙述」のみ（述語の確言形）のもの、「中途終了」の形、「疑問の表現類型」を表すもの（「か」「かな」等との共起）、「「たぶん」一語のみの使用」という点に有意な特徴が見られた。ここから、JNSは「たぶん」を用いる際、文末のモダリティ表現も多様に組み合わせているのに対し、CNSは「たぶん」という語彙的手段一つに依存し、表現する傾向があることが示された。

第8章（課題Ⅳ）では、「たぶん」が係る命題内容の性質に注目し、CNSとJNSの使用頻度、およびその具体的な使用例を詳細に考察した。命題内容は、A「成立・真偽性が確認できる客観的命題内容」（A-1～A-3）、B「話し手の主観表明」（B-1～B-3）、C「相互行為」の三つに大別した。CNSもJNSもAタイプの割合が最も高いが、各カテゴリーの使用頻度には統計的に有意な偏りが認められ、CNSはA-3「発話時点で確認不可能な命題内容」とB-2「願望・選択・断り・承諾・申し出の表明」で、JNSはB-1「話し手の個人意見・評価・価値観」とB-3「自己分析・内省」で使用頻度が高かった。具体例を見ると、CNSは絵描写タスクでA-3を顕著に多用し、背景となる経緯や人物の心理等、絵に直接描かれていない内容を推測する際に「たぶん」を多用していた。また、B-2では願望や断りに加え、JNSには見られない承諾・申し出の場面でも「たぶん」を対人配慮の手段として用いていることが観察された。これに対し、JNSは、話し手自身の意見や評価を「～と思う」などと組み合わせて慎重に提示し（B-1）、自己の性格や心内感情を内省的・客観的に語る（B-3）傾向が強かった。相互行為（Cタイプ）では使用率に大差はないが、JNSが相手の解釈に同調しつつ留保を示すのに対し、CNSはYes/No質問への応答詞として「たぶん」を用い、応答の断定性を弱めていた。

第9章（課題Ⅴ）では、「たぶん」の意味・機能に着目し、CNSとJNSの使用頻度、およびその具体的な使用例を詳細に考察した。意味・機能は、（1）「命題内容への不確定表示」（1-a「推量」、1-b「不確定明示」）、（2）「発話・伝達態度表示」（2-a「断定回避・内容緩和」、2-b「対人関係配慮」）、（3）「フィラー用法」に整理した。検定の結果、CNSでは1-a「推量」、1-b「不確定明示」、2-b「対人関係配慮」、（3）「フィラー用法」に、JNSでは2-a「断定回避・内容緩和」に使用頻度の有意な偏りが見られた。意味・機能を命題内容の性質と組み合わせて具体例を見ると、CNSもJNSも、1-a「推量」機能は、A-3「発話時点で確認不可能な命題内容」との結びつきが最も強く、特にCNSでは絵描写タスクで経緯・心理・因果関係を推論する場面に集中した。1-b「不確定明示」

機能は、A-2「未確認の命題内容」との共起が典型的で、CNS、JNSいずれも多く見られたが、CNSではさらに、代表例の提示、Yes/No質問への応答、希望・選択が定まらない場面での使用という特徴的な使用傾向が見られた。2-a「断定回避・内容緩和」機能はCNS、JNSともに高頻度で、B-1「話し手の個人的意見・評価・価値観」との結びつきが強く、意見・評価の断定を和らげる用法が中心であることがわかった。一方、CNSはB-2「願望・選択・断り・承諾・申し出の表明」との結びつきも強く、それに対し、JNSはB-3「自己分析・内省」との結びつきが強いという違いも見られた。2-b「対人関係配慮」機能は低頻度ながらCNSに使用頻度の有意な偏りが見られ、断りや依頼など対人的負担の大きい場面や、相手の認識を否定する際の摩擦回避に用いられていることがわかった。「フィラー用法」については、内容について思考途中であることの表示・時間稼ぎ、言い方の調整・再編集、語彙・表現探し、躊躇・和らげ、非流暢さに起因する繰り返し、発話終結・言いさし、という6つの機能に分類・整理した。このうち「語彙・表現探し」「発話終結・言いさし」はCNSにのみ観察された。ここから、第二言語使用における言語処理の困難さを反映するもの、あるいはそれを補償する手段として、また発話を曖昧に終える手段として、「たぶん」が頻繁に使用されていることが推察された。

第Ⅲ部結論（第10章）では、研究Ⅰ・Ⅱの分析結果を統合し、総合考察を行った。CNSによるモダリティ副詞の使用には三つの特徴が認められた。第一に、「たぶん」のような特定の語に使用が集中し、JNSに比べ多様性が低いこと、第二に、「たぶん」は有標な文末モダリティ表現との組み合わせが少なく、CNSのモダリティ表現が語彙的手段に依存する傾向があること、第三に、「たぶん」が推量だけでなく断定回避、対人配慮、フィラーなど多様な機能を担う表現として用いられていることである。このような使用実態に基づき、「たぶん」の過剰使用の要因として、以下の三点が挙げられた。一つ目は「たぶん」の機能の多様性・汎用性である。「たぶん」はさまざまな目的に使える「万能の曖昧化マーカー」とも言え、初級で導入される語であることから、学習者に頼られやすい語であると推察される。二つ目は日中のモダリティ表現手段の違いである。日本語が文末形式によってモダリティを表すのを主とするのに対し、中国語は語気副詞が述語の前で推量を担う。このことは、「叙述のみ」（有標な文末モダリティ表現を付加しない形式）の使用が多いというCNSの傾向と整合する。三つ目は第二言語の発話生成に伴う処理負担である。語彙探しの場面での「たぶん」の挿入や繰り返しは、「たぶん」が発話を管理する装置としても機能していることを示すと推察した。

以上、導かれた知見を踏まえ、日本語教育への提言として、語彙・構文・談話

の三つのレベルでの指導の必要性を示した。最後に、本研究の限界と今後の課題を挙げ、本研究をこれらの課題に取り組む出発点の一つとして位置づけて論を結んだ。

【講評】

本論文は、CNSによるモダリティ副詞の使用実態とその特徴を、推測統計を用いて客観的かつ明示的にとらえていること、同時に、CNSにおける特徴語「たぶん」に焦点を当て、個々の用例を詳細に分析・記述することを通じて、学習者の中間言語の特徴をモダリティ副詞という観点から実証的に明らかにすることに成功している点が高く評価された。論の構成および論文の記述も明快である。

一方、審査委員からは、以下のような点も指摘された。

- CNSにおける複数の「たぶん」の使用例を「和らげ」や「配慮」表現であるとしているが、その理論的根拠が必ずしも明確ではない。
- CNSの使用例の中には、自分の発言やその表現方法に対するいわば注釈として「たぶん」を使っていると思われる例も見られるが、この点についての分析が十分ではない。
- 上記のような例を含め、CNSの「たぶん」の使用には、JNSの「たぶん」の使用範囲を超えた、その文法的制約をいわば逸脱した創意的な側面が見られるが、これについては、対照中間言語分析研究としてより積極的に記述し、位置付ける余地があるのではないか。
- 「たぶん」とともにどのような形式が用いられているか、CNSとJNSで比較すると、JNSの方がノダやその関連形式、および終助詞などと複合的に用いる割合が高いと述べているが、これらの形式が「たぶん」と何らかの依存関係をもって共起しているのか、それとも単に同一文内に共存しているにすぎないのかが十分に論証されていない。JNSはもとよりCNSよりもノダや終助詞を多用する傾向があり、その一般的な使用頻度の差が「たぶん」との併用率の差として現れている可能性があるが、その点が十分に考慮されていない。
- 「たぶん」の過剰使用が他の言語を母語とする学習者にも一般化できるのか、また、モダリティ副詞に限らず、学習者に過剰使用される語がほかに見られる場合、それらの形式の過剰使用の要因と「たぶん」の過剰使用の要因との間に、何らかの関連性は見られるか。対照中間言語分析研究として、過剰使用についての何らかの理論化が可能か。

これらの指摘はいずれも、本研究の成果と価値を損なうものではなく、本研究の研

究意義を十分に認めた上で、今後さらに発展させていくための助言としてとらえられるものと言ってよい。質疑応答を通じて、コ氏はいずれの質問にも誠実に回答し、指摘された問題点についても十分に自覚的であることが示された。

【総合評価】

学位請求論文の内容、申請者による最終試験における論文内容の説明、および質疑に対する応答等を総合的に判断した結果、審査委員会では、全員一致で、本申請論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。

以上